

ライフエンディング研究会について

蓮宝寺住職・小川有閑

■趣旨

人口が減少する一方で、超高齢化社会を迎えている我が国では、これからの数十年、多死社会となることが予想される。たとえば、経済産業省では、こうした社会動向をふまえ、ライフエンド（死）とその前後を「ライフエンディング・ステージ」と規定し、各段階でのサポートに携わる様々な分野の担い手の連携を模索している。（平成 24 年 4 月「安心と信頼のある『ライフエンディング・ステージ』の創出に向けた普及啓発に関する研究会報告書」、<http://www.meti.go.jp/press/2012/04/20120426006/20120426006.html>）

文化的背景に目をうつせば、私たちは「老・病・死」をいかに克服するかというたゆまぬ努力によって豊かな生活を手にしてきた。一方で、「老・病・死」を免れる者は存在せず、「生きる」ことは、そのまま「老・病・死」なのでもある。豊かな生活のなかで、「老・病・死」は、私たちの視界から遠ざけられ、不吉なこと、忌避すべきものとして扱われるうちに、いつしか、私たちは「老・病・死」に対して思考停止してしまい、どう向き合えばよいのか分からなくなってしまった。また、かつては「老・病・死」を安心して迎えられるセーフティネット（家族、近隣の助け合いなど）があったが、社会は大きく変化をし、一人一人が厳しい選択を迫られる時代となっている。

本研究会は、上記の社会背景をかんがみ、一定の限られた地域内における「老・病・死」の専門家、つまりライフエンディングサポートの担い手の情報交換・連携を第一の目的とし、その先には、ライフエンディングの課題に直面している方々への情報やサポートの提供を目指すものである。

付言すれば、ライフエンディングにかかわる産業の拡大にともない、利益のみを重視し、個々人の QOL（クオリティオブライフ）をないがしろにした低品質のサービスを提供する担い手の出現も予想されうる。そのような事態を防ぐことも目的の一つと言えよう。なおかつ、上質のサポートを提供できるようお互いに切磋琢磨し、その結果、顧客を獲得することは、持続的・自律的な活動を継続するうえで必須なことであり、サービスを受ける側にとってもメリットとなるはずである。ただし、本会は、あくまでも、顧客獲得の場ではなく、一人一人ができる限り納得のいく人生が送れるよう手助けをすることを本分とする。

■エリア

多摩武蔵野地域（武蔵野市、府中市、小金井市、調布市、国分寺市、三鷹市、西東京市等）

■参加メンバー

宗教者、葬祭業、石材店、保健師、医師、行政書士、等

■活動内容：「ゆるく、たのしく」をモットーにした連携を目指す。

- ・定例会（月に1回程度）
- ・研修会（活動事例の報告、講師によるレクチャー、等）
- ・一般向けセミナー